様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２９日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：２１６５２００７
研究課題名（和文）　ポスト・ジャポニスム期のフランスにおける日本美術受容の研究

研究課題名（英文）Study on the reception of the Japanese Art at the Age of “Post-Japonisme” in France

研究代表者
藤原　貞朗　（ FUJIHARA Sadao ）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：50324728

研究成果の概要（和文）：1910～1920 年代、フランスでは大掛かりな浮世絵版画展覧会が開かれるとともに、多数の浮世絵研究書が刊行された。20 世紀初頭にジャポニスムが終焉するという定説とは矛盾する現象をどう理解すればよいか。文献学的調査によって明らかになるのは、ポスト・ジャポニスムとでも命名すべき美学のもとに、新たな世代が浮世絵を研究し、歴史的に再評価したという事実である。一言でいえば印象派美学を改め、古典主義的美学のもとに浮世絵を再解釈し、中国の水墨画の伝統のなかに位置づけるなどの歴史化の試みが図られ、再評価がなされたのであった。

研究成果の概要（英文）：During the 1910s and the 1920s in France, important series of Japanese wood engraving (ukiyo-e) exhibitions were held and a lot of academic books on this theme appeared. How can we understand these phenomena which happened after the enthusiasm of Japonisme ?　Our philological researches show that those who studied ukiyo-e during this period reevaluated it in basing on what we call the Post-Japonisme esthetics. In a word, they appreciated this art from the classical point of view instead of the Impressionnist one and placed it in the historical context of traditional Chinese ink paintings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,200,000	0	1,200,000
2010 年度	800,000	0	800,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,000,000	300,000	3,300,000

研究分野：美学・美術史
科研費の分科・細目：美学・美術史
キーワード：ポスト・ジャポニスム、日本美術研究、浮世絵版画、フランス陶芸、カリエス派

１．研究開始当初の背景

（１）従来のジャポニスム研究では、フランスにおける日本美術愛好および研究は 1900 年以降に急速に効力を失ったとされる。だが、現実には、フランスでの本格的な浮世絵版画研究や展覧会が 1910ー20 年代に活発化したり、日本陶磁に影響を受けた陶芸家が作陶を本格化させたりと、定説とは矛盾する現象が多々観察される。これらの現象を歴史的にどのように解釈すべきか、大きな問題として残っている。

（２）興味深いことに、ほぼ同時期の 1910ー30 年頃、ジャポニスム期に欧米で評価された浮世絵などの日本美術の研究や収集が日本においても活発化する。これは欧米のジャポニスムの逆輸入現象として理解しうる現象だが、そのプロセスやフランスとの具体的な影響関係については明らかでなく、分析と考察を行わねばならない。

（３） 20 世紀初頭から欧米で活発化する中国古美術研究や東南アジア美術研究に、それまでなされてきた日本美術研究がどのように関わっているのかという問題も、従来の研究では検討されてこなかった。ジャポニスム以後の日本美術研究の潮流を「ポスト・ジャポニスム」として捉え直し、その国際的広がりを視野に入れることで、新たな研究の発展を期待できる。

２．研究の目的

（１）本研究は、19 世紀のジャポニスム以後のフランスにおける日本美術研究、とくに浮世絵版画と陶磁器の研究状況を調査し、研究の活発化の背景となった思想と社会的・文化史的要因を明らかにすることにある。また、同時期に西欧で活発になされた他の東アジア美術研究と日本美術研究との関係についても基礎的な調査と考察を行う。

（２）20 世紀前半期を新たに「ポスト・ジャポニスム」期と位置づけ、実証的証拠を積み重ねることによって、この時期にいわゆる日本美術ブーム（日本美術愛好と日本研究）が終焉を迎えたという定説に異議を唱え、さらに、この時期こそ、今日につながる欧米での日本美術理解や研究にとって重要な時期であったのではないかと問題提起したい。

（３）また本研究を通じて、従来のジャポニスム研究に新しい原理と方法論の提案を行いたい。これまでの研究では、日本からフランス（欧米）へといういわば一方向の美術品と思想の伝達を問題としてきた。しかし、「ポスト・ジャポニスム」期には、19 世紀の日本美術愛好家の蒐集品や研究が、第二・第三世代の愛好家へと発展的に受け継がれるとともに、フランスに渡った浮世絵や工芸が、日本人によって買い戻されたり、あるいは、北米へ売却されたりなど、国際的な移動も多発する。ジャポニスム期におけるフランス人の浮世絵愛好の刺激を受け、欧米各国、そして日本において浮世絵に対する評価が高くなるという逆輸入現象も起こる。それゆえ、従来のジャポニスム研究が対象とした日本からフランスへという一方通行のモノと思想の流れを分析するだけでは不十分である。本研究では、フランスから日本へという逆方向の往還性、さらには、より広範な国際的広がりをもった範囲での複雑な移動の動性を問題とせねばならない。方法論的にいえば、一方通行のコミュニケーション分析ではなく、双方向、多方向の動的なコミュニケーション分析として、日本美術受容を再検討する必要性を提案できる。

３．研究の方法

本研究の方法は主に 2 つに分かれる。美術展やコレクションのカタログ等を対象とした文献学的調査と、美術館や個人コレクターが所蔵する美術作品を対象としたフィールド調査研究である。計画的に国外において、文献学的調査とフィールド調査を行った。

主な国外調査の場所は以下の通り。
フランス国立図書館、パリ大学美術史図書館、ギメ美術館付属図書館、国立東洋語学校図書館、フランス国立陶磁器美術館（セーヴル）、オルセー美術館（パリ）、装飾美術館（パリ）、リヨン美術館、ニエーヴル県立美術館、サン・タマン・アン・ピュイゼイ陶芸家記念館、プレムリー陶芸美術館、など。

また、収集と分析を行う文献資料（19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて刊行された本研究に関連する文献資料）は、英文・仏文・和文の文献を中心に 200 点を超えた。

収集資料の解析を行うにあたって、まず、19 世紀末から 20 世紀半ばまでの欧米における日本美術研究に関する年表を作成した。従来のジャポニスム研究において、19 世紀の関連年表や文献目録が作成されているが、20 世紀の同様の試みは皆無であるといってよい。基礎となる資料体の整理を行う必要があった。

収集資料の分析にあたっては、19 世紀のジャポニスムとの連続性と差異を明確にするために、主要な浮世絵版画の言説の基礎となっている美的価値観、美学的思想、歴史観の三点を分類し、欧米の当該研究の系統を明らかにした。日本の古来の資料や同時代の研究との比較研究も行なった。

４．研究成果

本研究では、主に、1900 年代～1920 年代にフランスで行われた浮世絵版画展覧会のカタログとその反響、売立カタログ、美術館のコレクションカタログ、浮世絵版画についての論文、書籍、展覧会批評を網羅的に調査し、分析を行なった。調査途上で入手しえた英語とドイツ語の文献も収集した。これらの収集資料を分析することによって、明らかにしえたのは、以下の３点である。

（１）1900～1920 年代のポスト・ジャポニスム期における浮世絵研究の進展の背景
（２）上記の時期における浮世絵研究の国際的拡散と競合
（３）ポスト・ジャポニスムの美学

以下、順にその成果を報告する。

（１）1900～1920 年代のポスト・ジャポニスム期における浮世絵研究の進展の背景

この時期は、19 世紀末期までのジャポニスム期に大量に蒐集された浮世絵版画が、その歴史的価値や美術史的価値によって選別され、コレクターの手を離れてゆく時期である。浮世絵版画を熱心に蒐集した第一世代の愛好家（ジャポニザン）たちは、蒐集品の整理を行い、次々と競売にかけていった。19 世紀末から 20 世紀の最初の 10 年間は、浮世絵版画の研究は本格化しておらず、公立美術館に寄贈しても受け入れる状態には至っていない。競売会を通じての作品評価により、歴史的価値と美的価値がひとまず研究され始める。

フランスでは、こうしたコレクターたちの研究の成果を世に問う展覧会が 1909 年から 14 年にかけて計 6 回開催されている。当時の著名な蒐集家たちがこれまでに集めてきた浮世絵版画を選別し、状態のよい最良の名品だけを編年的に集めて作品を展示し、その目録を作成したのである。こうして「プリミティヴ派（春信以前の 18 世紀の古版画）、「春信、湖流斎、春章」、「清長、文朝、写楽」、「歌麿」、「栄之、長喜、北斎」、「豊國、広重」の最良の作品が編年的に整理され、公表されることとなった。この展覧会の影響はきわめて大きい。

まず、浮世絵版画の名品目録の作成のために、当時の可能な限りの知識が総動員され、浮世絵版画の歴史的研究が促進された。美術専門誌に多数の浮世絵研究が発表され始めるし、また、展覧会に刺激されて自らのコレクション目録を作成し出版する蒐集家も現れた。ジャポニスムの時代には、浮世絵版画の研究を行なったのは、エドモン・ド・ゴンクールや S・ビングに代表されるように、愛好家やディーラーが中心であったが、20 世紀初頭には、蒐集家に加えて、国立美術館学芸員や国立図書館司書などの美術や歴史に携わる学者が浮世絵版画を研究対象とするようになった。学史的には、この変化は非常に重要である。

旧来、新来の愛好家への影響もまた大きかったことはいうまでもない。最良の作例が編年的に一同に提示されるのは、欧米でも日本でもこの時が初めてで、蒐集家のみならず、美術研究者も美術館関係者も、この展覧会で傑作の数々を初めて見る機会となった。蒐集家たちは自らのコレクションの価値を相対化することが可能となり、質の良くないものは躊躇なく、競売にかけたり、別のコレクターに譲ることができるようになる。たとえば、よく知られるように、アンリ・ヴェヴェールが蒐集していた浮世絵版画コレクションの一部が松方幸次郎の手に渡っているが、これは第一次大戦中のまさにこの時期のことであった。

（２）浮世絵研究の国際的拡散と競合

上述の松方の件に典型的なように、19 世紀末から 20 世紀初頭のフランスにおける浮世絵版画のコレクションの整理と選別は、フランス国外の愛好者と研究者の注目を引くことにもなっている。とりわけ特筆すべきは、ドイツ語圏の愛好家と研究者である。1890 年代から 1900 年代にパリで頻繁に開催された浮世絵版画の競売会には、フランスの前衛芸術とジャポニスムに関心のあるドイツの美術関係者が参加し、ドイツでの日本美術熱の高揚を促進することになった。たとえば、競売会の常連であったドレスデンの美術館館長であったフォン・ザイドリッツは独自に浮世絵研究を行い 1898 年に『日本木版画史』を出版している。欧米における浮世絵版画の最初の通史である。ドイツでは、ユリウス・クルツのように、この著作に刺激を受けた世代が、20 世紀型の実証的な浮世絵版画研究を開始し、重要な仕事を残すこととなる。日本美術とは無関係であった美術史家が同時代の美術史学的方法論のもとに、浮世絵版画を分析する美学的研究も盛んとなる。また、ザイドリッツの本はすぐに英語と仏語に翻訳され、ジ

ャポニザン以外の美術研究者に大きな刺激と影響を与えてゆく。

英国では、1870 年代を日本で過ごしたウィリアム・アンダーソンの膨大な浮世絵版画コレクションが大英博物館に収められ、カタログが作成されていたが、20 世紀初頭まで学術的な研究は行われていなかった。フランスやドイツでの浮世絵研究の活性化を受けて、あるいは、並行して、大英博物館でも蒐集品の整理とコレクションの拡大が図られている。英国のコレクターは、従来所有していたコレクションに加えて、パリの競売会に参加するなどして、蒐集品を豊かにしてゆく。それらが、1910 年頃から大英博物館に寄贈されてゆく。

フランスにおいても、展覧会ののち、英独の美術館の動向に同調するように、国立美術館は浮世絵版画の寄贈を受け入れ、選別的に収集を開始した。これにより、美術館学芸員や大学の美術史家による浮世絵研究が本格化する。1920 年代には、国立美術館での浮世絵版画展覧会が開催されるとともに、充実した解説の付くコレクション目録が作成されてゆく。

（3）ポスト・ジャポニスムの美学

以上のように、世紀末から 1910 年代にかけて、浮世絵版画の歴史的評価と美的価値判断の再評価の動きが活性化し、1920 年代に学術的な実証的研究が本格化する。ジャポニスムの潮流のなかで浮世絵版画が大規模に蒐集されたのが 1880 年代だとすると、およそ 40 年の年月を経て、蒐集から研究への転換がなされたことになる。学術的な研究には、この準備期間が必要だったといいたいわけではない。研究への転換のためには、浮世絵版画に対する美的価値観の変化が不可欠だったと考えられる。

ジャポニスム時代の浮世絵版画愛好熱は、これまで複数の研究者が指摘してきたように、また、同時代の一部の批評家や美術史家も直感していたように、印象派に代表される前衛美術の審美観に支えられていた。古典主義的な伝統的西洋美学とは異質の浮世絵版画の美的価値が、前衛的な芸術家や批評家によって高く評価されたのだった。ゆえに、この時期には、前衛芸術の美学を正当化するための研究や技法の研究が行われることはあっても、実証的な歴史研究が行われることはほとんどなかった。そして、印象派以後の前衛の一種の古典主義化に伴い、こうした印象派美学に基づく浮世絵評価も陰りをみせていった。

20 世紀の印象派以後の浮世絵版画研究では、対照的に、その歴史と古典的な伝統が研究の眼目となっている。印象派美学に基づく浮世絵版画評価が、日本および中国の絵画史研究の成果によって否定され、浮世絵版画が日本のみならず、東洋の古典的な絵画の正統な継承者であるかのようにみなす研究が多数登場する。たとえば、筆によるデッサンが大和絵に、風景の描写が水墨画の伝統に連なると説明されるのである。さらに、それを仏教や儒教の思想、あるいは日本古来の宗教との関連で美学的に考察しようとする研究も目立つ。こうした伝統的な東洋美術の近代的表現として浮世絵版画を歴史化する思想は、興味深いことに、フランスのみならず、英国、ドイツの美術史家や美術館学芸員に共有されることとなっている。

こうした 1920 年代の浮世絵版画、および日本美術に対する新しい関心を「第二のジャポニスム」と呼ぶ一部の研究者もいるが、背景となった美的価値観に以上のような大きな変化が認められるがゆえに、私は新たに「ポスト・ジャポニスム」と呼ぶべき段階を設定することを提唱したい。

浮世絵版画を再評価する新たな美学と歴史観の背景には、1920 年代の欧米の美術界の潮流とそのもと進展した東アジア美術全般に対する関心と眼差しの変化を読み取ることができる。とりわけ、フランスとドイツでは、第一次世界大戦後のいわゆる「秩序への回帰」の思想のもと、美術界は前衛と保守を問わず、古典主義的な傾向を強めていった。アジア美術に対する眼差しもその例外ではなかった。中国や日本、さらには東南アジアの美術に対しても、古典主義を軸とする美術史観が支配的となる。また、20 世紀に入ってからの歴史的動乱のなかで、中国の古美術に対する美的嗜好と歴史的・考古学的研究が活発化する。1920 年代以降の浮世絵版画研究は、こうした時流のなかで、新たに東洋の古典と伝統に根ざした解釈のもとに再解釈されねばならなかったのであった。

本研究はポスト・ジャポニスム期の浮世絵版画研究、ひいては日本美術研究の状況を明らかにすることによって、従来のジャポニスム研究がもたらした成果を綜合的かつ相対的に再考する契機を与えることができるだろう。さらに、発展的に、20 世紀に日本美術とともに盛んに研究されるようになった中国古美術研究や東南アジア美術研究との関わりのなかで、浮世絵版画の研究史を見直す必要がある。従来のジャポニスム研究を日本美術受容の研究に閉じ込めて閉塞させるのではなく、より広範な東洋美術受容の研究へと切り拓く可能性を示すことができたと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 藤原貞朗、「日本の東洋美術史と瀧精一」、稲賀繁美編『東洋意識、夢想と現実のあいだ』、2012 年、301 - 334 ページ、査読無。

② 藤原貞朗、「オリエンタリストの日仏交流～大戦間期および戦時下の日仏交流の逆説」、『日仏文化』79 巻、2011 年、75－97 ページ、査読無。

③ 藤原貞朗、「日仏会館誕生前史、リヨンと日本の知られざる文化交流」、『青淵』728 巻、2009 年、20 - 23 ページ、査読無。

〔学会発表〕（計 2 件）

① 藤原貞朗、「アンリ・フォシヨンとポスト・ジャポニスムの美学」、ジャポニスム学会例会、2011.7.9、東京。

② 藤原貞朗、“Art Appreciation in the Far East as Esthetic Communication”、国際日本文化研究センター国際集会 Japanese Aesthetics and the Visuality in Question、2009.7.6、京都。

６．研究組織

(1)研究代表者
藤原 貞朗（FUJIHARA SADAO）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：50324728